（参考）カエルツボカビフォーラム 2007 で発表された沖縄の事例について）

1．検査結果について

PCR 検査により沖縄で陽性とされたのは、沖縄で捕獲されネット販売されていたシリケンイモリ並びに沖縄美ら海水族館が飼育していたオキナワアオガエル及び 18 年1月あるいは 12 月に本部近郊で捕獲したシリケンイモリ。

沖縄美ら海水族館のオキナワアオガエルは水槽内で飼育されていたところ本年3月に死亡した。カエルツボカビが疑われる症状等はなかったが、確認のため検査を行ったもの。このオキナワアオガエルの PCR 検査結果では、1試料は陽性となったものの他の1試料は陰性で、病理検査でもカエルツボカビは確認されず、死因はカエルツボカビ以外と考えられている。

シリケンイモリは、現在も生存しておりカエルツボカビ症を疑う症状は出ていない。

オキナワアオガエルとシリケンイモリは別の水槽で飼育されていたが、これらと同じ水槽で飼育されていた他の個体では PCR 検査は陰性であったり、オキナワアオガエルについては2つの試料のうち1つが陽性で1つは陰性となっているなど、不確定な結果も得られていることから、現状を正確に把握するために、再度飼育個体から試料を採取し検査を行っているところである。

2．検査結果の評価

PCR 検査は、極めて感度が高く、極微量でも対象とする特異的な DNA の塩基配列が存在すれば検出が可能であるが、その分、試料の汚染等にも十分留意する必要がある。

本検査においては、カエルツボカビに特異的な DNA の塩基配列を分析するようにしているが、カエルツボカビを含むいわゆるツボカビ類全体の塩基配列が全て明らかになっているわけではない。このため、今回の分析結果は、カエルツボカビが有している塩基配列と同じものが検出されたということであり、カエルツボカビである可能性は極めて高いが、その他のものである可能性もある。

沖縄の例は、野外由来の個体ではあるが、試料を採取した際には、施設内の水槽で飼育されており、感染ルートを特定することはできず、必ずしも野外にカエルツボカビが存在するとは言い切れない。また、カエルツボカビが疑われるような症状は観察されておらず、同じ水槽内でも陰性の個体が存在することから、美ら海水族館で展示している両生類全般にカエルツボカビが感染している状況ではないと考えられる。

野外の状況については、正確な情報を得るために、さらに野外試料を採取･分析し、情報を把握していくことが必要。